

**Diane Hubka Goes to the Movies**

SSJ Records - Japan

Japan's *SWING JOURNAL* - 5 out of 5 Stars!

by Shohei Chujo

Arguably the biggest discovery since Gambarini

What an attractive voice! Diane Hubka's voice is airy and clear, with a hint of huskiness that gives it character. It is very supple and graceful, a great match for jazz. I fell in love with her voice when I heard the first note of the first song. She has a wonderful sense of swing. Instead of scating acrobatically, she has a natural and bouncy feel that is very charming. A type of singer who is most effective at medium or medium-fast tempo that can be heard in the first and last song of this album, she has an air of relaxed charm and brings happiness to any listener. Among the female vocalists who came to our attention recently, she is arguably the biggest discovery since Roberta Gambarini. The great efforts of the band that supports her

should not be overlooked, either. While the key here is pianist Jacob who also provides the arrangements, the rhythm and melody played by the guitar add attractive accents that cannot be found in the ubiquitous piano trio setting. The trumpeter is also quite good. Especially, the drumming of LaBarbera, who accompanied Bill Evans in his last years, is so good that I wondered aloud, "Was he so good at accompanying singers?" It is rare to find such a coherent unity of six musicians in a group led by a vocalist. It is a thing to behold when Hubka sings in unison with her band mates based on that solid foundation. Special mention should be made for the interesting song selection. As you can see from the title, it is a collection of film music. This surprising repertoire would impress even the most seasoned jazz fans.

Masamichi Okazaki - 4 1/2 stars: *Slightly husky, supple and sensitive*

I am intoxicated by the slightly husky, supple and sensitive voice of Diane Hubka. Hubka, whose father is reportedly of Czech descent, was born in New York State and is now based in Los Angeles. She's an up-and-coming artist already with three albums under her belt.

This album consists entirely of film music, and the selections are interesting. Seldom performed tunes are mixed with well-known classics, which make for a very nice atmosphere. "All God's Chillun Got Rhythm" is known through great recorded performances by Bud Powell and others, and indeed it is a theme song of a Marx Brothers' movie. Hubka demonstrates her jazz chops by throwing in a scat solo. With a touch of elegance and class, her expressions are well controlled and very pleasant. Her romantic side shows through in Burt Bacharach's "The Look of Love", and her sophisticated taste in the bossa nova treatment of Jerome Kern's "I'm Old Fashioned." A theme song of a 007 movie is rendered as an emotional ballad. And the best thing about this album is that a hidden gem like "The Long Goodbye" appears unexpectedly. In this tune Saunders' trumpet solo intertwines with the plaintive voice of Hubka, and the effect is very beautiful.

Hubka is also a good guitarist, and we get to hear her accompany herself in Luiz Bonfá's "Manha de Carnaval."

Diane Hubka Goes to the Movies

Japan's SWING JOURNAL Review - May 2007

(→P.17より続く)

百花繚乱の賑わい 女性ジャズ・ボーカル 2007春



Diane Hubka

Photo Courtesy of Swing Society Of Japan

ダイアン・ハブカ、ご覧の通りひじょうな美女だけど、ジャズ・ボーカルに対する姿勢が真剣なのがよろしい。例えばこんな具合。

「好きなソングライターはまずボブ・ドロウです。(デビル・メイ・ケア)とか好きね。なにより歌詞がステキです。クレバーでジャジー。それとアントニオ・カルロス・ジョビン。今回も(ダブル・レインボウ)を歌ったけど、彼自身がうたうのも好きなの。ポルトガル語のサウンドが好きで、だから、ただ今特訓中」

羨好みであります。

「歌手で好きなのは、初期のカー

メン・マクレエ、エラは全部好きね。サラはマンデル・ロウと組んだ『アフター・アワーズ』、ナンシー・キングならステイブ・ウルフとの『ファースト・デイト』という具合。あと、クリス・コナーとヘレン・メリルもお気に入り。「チェイシン・ザ・バード」とご存知『ウイズ・クリフォード・ブラウン』。シャーリー・ホーンはワシントンに住んでいた頃、時々聴きました」

いかがでしょう。なにも注釈が必要なし。

「ジャズを聴く以前は、ジョニ・ミッチェル、カーペンターズ、それにオ

ールマン・ブラザーズ・バンドといった具合。日本の女の子も、同じでしょう。それがガラリと変わって、レスター・ヤング、ビル・エバンス、ジム・ホール、ウエス・モンゴメリーになるのよね」

今回のアルバムで好きな曲は。「マンシーニが好きで、だから(ムーニー・リバー)も好きだけど、もっと好きなくラバース・イン・ニューヨーク)が歌えてよかった。勿論、他のトラックもいいのよ」

オードリーとジョージ・ベバードがマンハッタンを散歩するとき、コーラスのハミングで流れるのが印象的だったね。でも歌う人は珍しいです。ところで、これからやりたいジャンルは。

「それはもう断然ボサノバね。そのためにポルトガル語を習っているぐらいなの」

なかなか周到な女性で、目標をしっかり持って、それにコツコツ近づいていくタイプだ。

「このアルバムも長い時間がかかったけど、ハリウッドで映画の仕事をしているミュージシャンと知り合っていて、たくさんの主題歌を聴くうちに、こういうのを作ろうと思ったの。なにより、このクリスチャン・ジェイコブのピアノとアレンジ、ステキでしょう。息が止まるくらい美しいと思う」

実は年内に来日の予定という。嬉しいではありませんか。早く麗しきご尊顔を拝したい。



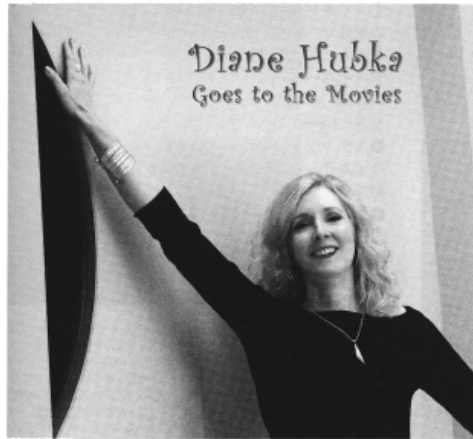
「ザ・ルック・オブ・ラブ/ダイアン・ハブカ (VSOJAZZSSJ)」

ダイアン・ハブカ 好きなソングライターはボブ・ドロウ。それとジョビン

Diane Hubka Goes to the Movies

Japan's SWING JOURNAL Review - May 2007

ザ・ルック・オブ・ラブ/ダイアン・ハブカ



①神の御子はみな踊る ②ダブル・レインボウ ③ザ・ルック・オブ・ラブ ④ラバース・イン・ニューヨーク ⑤ヒズ・ア・トランプ ⑥ザ・バッド・アンド・ザ・ビューティフル ⑦アム・オールド・ファッションド ⑧ロング・グッドバイ ⑨クローズ・イナフ・フォー・ラブ ⑩007は二度死ぬ ⑪ワイルド・イズ・ザ・ウインド ⑫カーニバルの朝 ⑬インビテーション
●ダイアン・ハブカ(vo, ⑫: g) カール・サウンダース(tp, flh) クリスチャン・ジェイコブ(arr, p) ラリー・クーンズ(g) クリス・コランジェロ(b) ジョー・ラバーベラ(ds) 2005, 06年録音 《DSDマスタリング》
●ボリスター/バウンディ(VSOJAZ/SSJ) XQAM-1504
⑤¥2,800 4月25日発売

C
D



ガンバリニに次ぐ発見とって過言でない

何と魅力的な声だろう。美声とか声量が豊かだとかいうのではない。軽やかで、透明感のなかにかすかにくすむ個性があり、とても柔軟に化する歌声。ジャズにぴったりだ。冒頭の第一声を聞いて惚れこみました。それにスイング感がすばらしい。曲芸的にスキヤットしたりするのではなく、あくまでも自然に弾んでいく感じがじつにチャーミングだ。冒頭の①やラストの⑬のように、ミディアムからミディアム・アップのテンポで最高の効果を発揮するタイプの歌手で、リラックスした雰囲気の中で聴く者を幸福にする。最近の女性ボーカリストのなかでは、資質はまったく異なるが、ロバート・ガンバリニに次ぐ発見とって過言でない。彼女を支える伴奏陣の健闘も聞き逃さない。編曲も担当するピアノのジェイコブが要だが、ギターの刻むリズムやメロディが通常のピアノ・トリオの定型にない魅力的なアクセントになっているし、トランペットも悪くない。特に、晩年のビル・エバンスと行を共にしたラバーベラのドラムスが、「歌件こんなうまかったの？」と思わず眩くほど見事で、六人合わせて一つのユニットという一体感はボーカリストのグループでは稀だろう。その基盤に乗って、楽器とのユニゾンを巧みに決めていくところも聴きものだ。選曲の面白さも特筆したい。原題は「ハブカ映画へ行く」で、映画音楽集なのである。この意外なレパートリーには筋入りのファンも唸るだろう。(中条省平)

ちょっぴりハスキーで、しなやかな情感をもっている

ちょっぴりハスキーで、しなやかな情感をもっているダイアン・ハブカの歌声に、うっとりさせられる。父親がチェコ人の血を引いているというハブカは、ニューヨーク州の生まれで、現在はロスに拠点を置いて活動をおこなっており、すでに3枚の作品をリリースしている注目株。このアルバムは映画音楽ばかりをとりあげて歌っているのだが、その選曲が面白い。よく知られている名曲のあいだに渋いナンバーが混ぜられていて、それがじつに良い雰囲気を作りあげてゆくのである。①はバド・パウエルの名演などで知られるもので、じつはマルクス・ブラザーズ主演の映画の主題歌。ハブカはスキヤットなどもまじえジャジーなセンスを発揮しており、どこかに優雅な気品を漂わせて、節度をもった表現のコントロールを聴かせるのが気持ちいい。パート・バカラック③のロマンティックな表情。ジェローム・カーン⑦をボサノバで料理するあたりの洒落たセンス。007シリーズの主題歌をしっとりしたバラードで綴る⑩、そして極めつきは、⑧のような秘曲をさりげなくとりあげていることだろう。哀調を帯びたハブカの歌声に絡むサウンダースのトランペット・ソロも、とても美しい。ハブカはギターも上手いというが、ルイス・ボンファ作⑫では、そんな彼女の弾き語りを目にすることができる。(岡崎正通)